

## 第9分科会

# 文化が担う地域社会

荒木 昭夫（日本児童・青少年演劇 劇団協議会）

文化の分科会。10年前の、1990年〈東京〉集会では「文化・芸術状況を考え、今協同を問う」として、各種文化団体がその現状を出し合ったが、ただそれぞれに「主張と困難」をひたすらに訴える、という状態にとどまっていた。

92年〈京都〉。この年は《教育・文化の分科会》として開催し「“こころの時代”に考える、自立と協同 愛の人間像」というタイトルで、児童劇団やまびこ座など子どもに関わる教育活動が報告され、文化に触れた子どもの成長が語られた。

94年〈名古屋〉では「文化の協同と協同組合」という表題で、長野の田楽座、高知での映画づくり、名古屋の劇団うりんこのそれぞれの報告が続いた。この時点で「自らも「出資」して文化の活動を起こす運動」という議論が初めて表に出ることとなる。

96年〈仙台〉は「文化と関わった仕事づくりと地域おこし」がテーマであった。

会津昭和村のからむし織り、喜多方文化プラザ、遠野の語り部、山形フォーラムの「映画運動」、北海道3年続きの「子ども舞台祭典」。一住民、自治体、創造者、それに加えて地元企業家。この4者を底辺とした円錐形の協同で築く事例が示されて、参加者はハッとした。

98年〈広島〉。「文化—それは協同労働の枝に咲く」と銘して、劇団風の子中四国、出前

の音楽集団CAME、高知県「こども課」の活動が紹介されて、この日はみんなしつとりと、落ち着いた気分で別れることとなる。

そして終わりの感想文に次のような詩が一篇、書き残されていた。—今、私はこの場に座っている。／耳も目も、いやからだ全体で聞いている。／それぞれの話が生き物のように、私のからだの中に流れ込んで、頭の中で、からだの中で、ミャクミャク ミャクミャクと音を立てている。／なんとすばらしい生き方を歩いている人たちなんだろう。／いや、その道はやはり自分で歩くしかないのだ。／21世紀には、文化…協同労働の枝に咲く花は、どんな花が咲くことだろう。／どんな実をつけるのだろう。—（高齢協・岡山 奥原ヒサコ）

その21世紀。私たちはどんな花を咲かせるのだろう。「文化が担う地域社会」—市民事業の、文化分野での展開—を今、語るのである。

事例発表（1）東京都・荒馬座 狩野猛＋穴原武夫（板橋演劇鑑賞会）

「創造者とその集団を支える社会」

事例発表（2）山形県・共立社 鶴岡生協 佐藤誠一

「文化と共に成長する子どもと大人とその組織」

事例発表（3）東京都・日本ジャーナリス



ト会議 佐藤一晴

「メディア産業の社会的対話—ILO国際シンポジウムから」

以上四氏の人選の意味はその掲げたタイトルを綴れば読み取れよう。創り手と受け手と支え手が、互いに高まり刺激しあって、文化を深く享受する時代に創り変えたいとの決意から、「市民事業としての、文化分野での展開」を拓く議論を起こしたい、としたものである。コメンテーターにはポローニヤからの報告で知られている佐々木雅幸立命館大学政策科学部教授にお願いした。先の四氏の報告を、文化協同組合先進地からの切り口で、我が国のこれからを展望したいとしたからであった。

**狩野猛** 荒馬座は板橋に根を下ろした。中小企業のこの下町は60年代は争議の時代だったから町にたくさんの人がいた。この人たちと出会っていて、稽古場がほしいと相談して、毎月100円の貯金をして貰って5年で建てた。太鼓を叩くものだから木造だから建物自体が共鳴して大変だった。だから次は鉄筋に建て直した。この時は一口1,000円になっていたがやはり5年で建て替えた。次は長野県八千穂村、そして今は埼玉県三郷。稽古場建設4回目の挑戦をしている。でもそれは人と人との交流だった。たくさんの人が太鼓を叩いたし、たくさんの人たちと励ましあった。地元が集団

## パネリスト

狩野猛（荒馬座）

穴原武夫（板橋演劇鑑賞会）

佐藤 誠一（山形県・共立社鶴岡生協）

佐藤一晴（日本ジャーナリスト会議）

## コメンテーター

佐々木雅幸（立命館大）

## コーディネーター

荒木昭夫（日本児童・青少年演劇劇団協議会）

を支えた訳だ。

**穴原武夫** 板橋演劇鑑賞会の事務局長をしている。板橋では子ども祭りや夏の平和盆踊りは恒例のものだ。子どもはもちろん、誰だって一度はあの櫓の上で叩きたいものだと思っている。だからこの催しは商店街が、つまり街が活き返る。荒馬座の人たちはどうしてあんなに生き生きしているのだろうと思い、人は彼らと出会いたがる。創造集団と地元とはそういう繋がりで生き合っているという関係だった。

**佐藤誠一** 鶴岡生協の設立は'55年。共立社・子育て協同は'78年。生協活動の基本は「班」だ。「班」に人が集まると暮らしが話題。そして必ず子育ての話。それは教育と社会の問題に繋がって、大型スーパーの進出阻止という事件ともなる。その重なり合いの歴史であった。売上50億を誇っていたダイエーが20億にも落ちてきて、我が生協「コピー」が競り勝っているという状況。それは「班」の活動が健在であるからだ。そして鶴岡はポローニヤとの姉妹都市。

**佐藤一晴** ジャーナリスト会議の運営委員という肩書だが、音楽家ユニオン事務局長が本



児童演劇の協同組合は次に8ミリ映画も制作する。新しい会社を協同出資で創るという訳だ。学校教育とのタイアップもあり、子どもの観客は大人になるとヌーヴァ・シエーナの方へ行く。求められているのはコンテンツ(中身・内容)だ。欧州ではこれらの動きをクリエイティブ・インダストリーと言い、アメリカ文化に対してはこれを「文化帝国主義」と批判する。「道具」をどう使うかは人間の知恵だが、欧州は知恵と歴史を持っているから、芸術を地域の再生に使う。先の盆踊り、商店街まつりはそれだ。今必要なことは公共投資より生活の活性化。心が病んでいるのだから、優れた文化芸術を育てることが正しい戦略となる。つまり創造的な街づくりである。金持ちのための文化論ではなく、文化的半失業者、つまり芸術大学の卒業生に仕事を与えて、住民参加の再活性化を考えた。そのためにITのネットは有効で、これはグローバルでもあり、またコミュニティにもと、その両面に効果を持つ。ITはツールだ。ゲームで遊ばれて若者に馴染んでいるが、取り込めば同時に伝統的な仕事にも繋がる。そこに新しい仕事の方法がある。スエーデンの例もそうだが、ITで仕事を失い貧しくなったのだから、ITで取り戻そうという考えなのだ。

### 「売り買いの関係でない関係」についての議論

この分科会、早くも午前の時間帯で一定の合意と展望に近づいたようであったから、今一つの懸案を深めてみたいと司会者は考えた。

6年前のこの分科会「今、協同を問う名古屋集会」(94年)では、その時点でもっとも前進した「協同」の取り組みは劇場運動であり、「上演協と「劇場」との関係である」との発言があって、それはやや部外者からの発言であったのだが、果たしてそれはどうであったか。

この問題をその後の6年の経過を思い返して検証してみたいという思いが司会者には持ち上がった。つまり本日の議論を、今語られている「協同」の論理を切り口としてしてみると、あの「劇場運動」はどのような位置になるのかである。

「劇場運動」発足の当時、「劇場運動」とは今誕生した新しい運動であり、ここで交わされる創造者と享受者との間には、従来の常識で言う「売り買いの関係…ではない」という関係なのだ、という言葉が創られていた。これは鑑賞する側からのことばなのか、あるいは劇を売る側から言い出したものなのか。いずれにしても従来の常識を超えた「美しい言葉」として使われ始めていたのであった。だが公演が終わった後の上演料の受け渡しの現場でもこれが使われる瞬間があった。「ねえ。これは売り買いの関係ではないのですから…」

なるほど運動上ではすっかり「美しいことば」だと思っていたそのことばも、こうして値切る言葉としても使われるものであったのか。

「劇場運動」はまだまだ「発展途上」の運動であるので、財政的にも支援してほしい」と言う意味がその人の本意ではあった。だから劇団はそれを理解した。いや、理解するようにと努力してきた。なぜならば劇団の方こそが、「支援してよ」と叫びたい状態であったのだから。さてこのいよいよますます、競争の思想が猛威を奮う資本主義の世界にあって、相手の悩みとその苦境が理解し合える人間の関係を、より高度に構築して行くことが、どうすれば可能となるのか。これが我が国の児童・青少年演劇人の、現時点でどうしても獲得しなければならない理論と実践の課題なのであった。

だからそれを「その「苦しい」部分を行政側が補填するのだ」というのが、文化経済学



望を記す。発言者についてのコーディネートは適切で、この10年の中ではもっとも内容は深まったと思える。しかし参加者についての準備はしていなかった。強く反省し次回に

期す。またこの先の取り組みも早速、策を講じなければならぬと思う。

(狩野猛、佐藤誠一、佐藤一晴氏らの報告は当日資料集にある。本稿では重複を避けて省略した。)

## 参加者の感想文より

### 狩野 猛さん

現在、人と人との関係が薄くなり、人と人をつなぐ文化活動がますます重要になってきていると思う。文化団体は地域との関係無くして存在することが難しいが、合わせて芸術文化の社会的価値について、理論的にも主張する努力の必要を痛感した。参加者がもう少し多かったら、いろいろな意見が聞けて良かったと思う。

### 穴原武夫さん

文化活動の本質的な役割が具体的に見えたような気がする。人間が社会と、そして同じ人間と係わりあうことがどれほど大事なことか。そしてその実践の場が、住み、生活する場所で、信頼を積み重ねて協同の方向へ一緒に持って行く事の大切さを実感。

### 佐藤誠一さん

荒馬座の地域で果たしている役割は目に見えないものも含めて大きなものであると思う。文化に対する国の関わり方が、欧米とあまりにも違い過ぎた。改めて公共財の位置付けが必要だろう。

### 佐藤一晴さん

コメンテーターから、ポローニヤやわらび座のITの取り組みを聞いて、あらためて新しい技術的発達を積極的に活用した、現代的な芸能活動の展開の重要性を痛感した。さまざまな芸能集団が地を這うような活動を展開しているさまを伺って、素晴らしいという思いを新たにするとともに、もう少しシステムチックで科学的な、芸能に対する公的支援の重要性、正当性を証明するノウハウを共通の資産として蓄積する必要性も感じた。

### 渡辺一信さん(長野厚生連労組)

文化活動が人間が人間らしく生きていくための活動であるとすれば、医療や保険、福祉の仕事も広い意味では文化活動だと思う。人づくり、地域づくりのために文化活動の意義を改めて確認して、文化と仕事を結び付けた連携組織を前進させたいと思う。

### 渡辺哲さん(労協センター事業団)

一般参加者が6人だったのは寂しかった。佐々木先生が言っていた、公 共事業に金をつぎ込んで景気回復には結びつかないという意見は、私が以前から考えていた事で共感した。ソフトウェア、個性的な人材育成に金をつぎ込むべきだと思う。今ほど交通機関や情報手段が発達した時代には、地域ごとに特色ある文化を作り出すのは難しい。しかしインターネットで同じ趣味を持つ人同士が集まることは以前よりずっと盛んになっている。そこから新たな文化創造がはかれるのではないか。

### 仲野邦彦さん(遠賀中間中高年事業団)

佐藤一晴さんの話が非常に参考になった。グループホームを作ったら、その町の老人文化運動のセンターになり得るように育て、町内の老人会に定期的に文化運動のとりくみの成果を披露し、豊かな老後の暮らしに役立てたい。

### 後藤武弥さん(劇団うりんこ)

世界は広いと思った。ポローニヤの協同組合の話の一端を聞いた。優れた協同の実践を知ることの大切さを感じた。第9分科会への参加者が少なかったが、これはなぜだろう。多くの芸術団体は協同することで各の団体の活動を支えているのに。芸術団体の抱える問題を他業種の団体も聞くというような討論に向かうことができると良いなあ！